

第3回尼崎市環境基本計画策定部会 議事概要

日時 : 令和5年1月12日(木)午後2時00分から午後4時00分まで
場所 : 尼崎市役所中館8階 8-2会議室(Web会議システム併用)
出席委員 : 7人
傍聴者 : なし

○開会

- ・定足数の確認
- ・資料確認

○議事

議題1 アンケート結果(速報)について

事務局 :

—資料1、資料2、資料3について説明—

部会長 :

説明ありがとうございました。ただ今の説明に対して、何か質問や意見がありますか。また、今回はアンケートの速報がありましたが、この結果を基に議題2と3の環境像と方針・施策を今回と次回も検討します。速報となっていますが、単純集計の結果の傾向はほぼ変わらないと思いますので、そこを中心に感想をいただきながら、有効な分析方法や環境像、方針・施策の検討に向けて確認したいこと等があれば、質問していただきたいと思います。

共分散構造分析については分析が途中のため、次回の分析結果を待つということで結構だと思います。

委員 :

ありがとうございました。まず質問させていただきます。資料1の3ページの問3に居住の地区の結果が示されていますが、これは住民数の割合に合わせてアンケート用紙を配られたのですか。結果の分析で地区ごとに回答数の多少が示されていますが、そもそもの住民の数が多ければ、そのような結果になると思います。

また今回の調査で、若い方の意見をしっかり聞くことができているのは非常に良いと思いました。そして、これは感想なのですが、若い方の環境への関心が低いという結果に少しショックを受けました。ただ、若い方にも知識はしっかりあるようです。広瀬モデルのポイントとなっている、知っているということ、関心があるということ、行動化との関係をど

のようにすればいいかをこの部会で確認できればと思います。

アンケート結果の資料は市民についても事業者についても、非常に細部までまとめられていますが、回答がどのようなものだったのかというところまでで終わっています。

それをどのように読み解くのが重要になってきますので、事業者についても、市民についても、尼崎における特徴についてまとめてもらえれば、これからの議論のベースとなると思いました。

例えば、省エネをしない理由については、お金がない、機器がない、知識や情報がないという理由がすぐに出てきます。そうであれば、政策をどうするのか、補助金を出すのか、上手な補助金の出し方とはどのようなものか、そのようなことを部会では議論できればよいと思います。以上です。

部会長：

質問について、事務局からはいかがですか。

事務局：

配布については、6地区において人口と、年齢層の比率を加味しています。実際の人口比と回答の割合を見ると、数パーセント程度の誤差があるという状況です。

部会長：

人口や年齢層の比率を考慮しているということで、統計的に正しいというよりは、結果として満遍なくということ優先した配布・回収であると理解しています。全体的に、若い世代は知らないという回答が多くなっていますが、自然の体験は、現役世代である40代と50代で少なく、若い世代のほうが多くなっています。先ほどの委員の話のとおり、行動を起こすかどうかには何が効いているのかということは、主に共分散構造分析の結果を待つこととなります。もし、それではうまく結果が出ないということであれば、市民アンケートの前半の、自然への関心があるか、環境体験をしたことがあるか、などの質問を条件にして、後半の結果とクロス集計することでも分析できるかと思っておりますので、次回までに検討をお願いします。他にもありますか。

委員：

ありがとうございます。私も質問というよりは感想に近いものになりますが、市民アンケートで、今回は若い方、比較的新しく尼崎に来た方の回答が増えました。それはウェブでの回収という選択肢があった効果なのではないでしょうか。その結果、前回のアンケートとは回答者の属性が異なっているので、前回の結果との単純な比較はできなくなっており、そこが難しいと思いました。

例えば、さまざまな環境学習活動の参加状況などは、今回はむしろ、前回よりも低くなっ

ています。これは若い方や新しく尼崎に来た方の回答の割合が前回よりも増えたためではないかと感じました。そのため、場合によっては回答者の属性別に整理してから前回と比較しなければなりません。

この後の議題になるかと思いますが、方針・施策の所に参加している市民の割合などの指標が出ていますが、ウェブで若い方に尋ねたときと、そうではないときとでは市民の割合がかなり違うとなれば、その指標の増減を評価しても、アンケート回答者に占める若い人の割合が増えたためであるということになってしまうかもしれません。参加した市民の割合や意識の割合という指標の増減を評価する際は、それが問題になる可能性がありますので、この点を指摘しておきます。

事業者については、全般的に情報が不足しているので取り組む予定がない、市に期待することは情報提供である、などの回答が多くなっています。思い付きで申し訳ありませんが、今回は 500 の事業所にアンケートを配布しており、結果的に情報が不足していると回答した事業者が多かったのであれば、アンケートのお礼も兼ねて、500 の事業所に今回のアンケートの集計結果の報告や、市として行っている支援事業の紹介などの情報提供をすることもできるのではないかと思います。以上です。

部会長：

今回は今まであまり聞くことができていなかった若い世代の意見も聞くことができたことをよしとするならば、私たちはこの議論を基に計画を作っていくので、今後の評価についても同様の回収の方法で、計画の指標を測っていくことが妥当ではないかと感じました。

今の話にあったようなアンケートのフィードバックももちろんですが、そもそも、若い方や中小の事業者などは、関心も知識もそれほどないという状況にあるので、皆で環境を改善していこうという計画を作っても、理解してもらえない可能性が高いです。そのため、同じ内容を書くとしても、言葉の表現や伝え方をより平易なものにし、まずは誰もが知っているという状況をつくるための配慮が必要だと思いました。

委員：

アンケート集計、共分散構造分析など、大変な作業をありがとうございました。今後のデータ分析の際に意識してほしいことが、2点あります。

1点目、資料2の共分散構造分析についてです。速報なので、これから新たな結果が出てくると思いますが、結果をどのように解析し、どのように提案していくのかについては、頭を悩ませるところがあります。資料2の4の(1)から(4)までを見ると、実行可能な行動メニューを提示することが有効ということが示されています。確かに、結果としてはそのようになるのだろうと思いますが、これだけを出すと、このようなことは分析をしなくても分かると言われかねないと思います。せっかく共分散構造分析を使っているのに、これを使うからこそこれが分かるというアピールになるものがあれば、この分析を使った意義が出

てくると思います。

2点目です。資料3の従業者数の質問があります。これを使って、従業者数別で、それぞれの質問の結果がどのように変化するかという、クロス集計のようなことをするのもよいと感じました。温室効果ガスの排出量を把握としているかという問11について、中小企業の回答としては行っていないというものがかなり多いのではないかと予想はできますが、クロス集計をすることによって、これが改めて分かるのではないかと思います。この後の議論になるでしょうが、それを踏まえて、資料5の方針・施策で、事業者向けの取組にどのように反映させていくかという課題があります。例えば、公平性に関わってくるかもしれませんが、中小企業に手厚く対応するということについての議論につなげられるのではないかと思います。以上です。

部会長：

分析の視点を述べていただき、ありがとうございます。次回までに、今いただいた観点での分析を進めてほしいと思います。他の議題も控えていますが、いかがですか。

委員：

ありがとうございます。私の場合、このようにデータを基にして考える機会が少ないので、非常に驚いている部分があります。実は、私も10年ほど前に、ある地域の子どもたちにアンケートをとる機会がありました。その時の結果もそうなのですが、市民が何を考えているのかについては、数字を見たときの感覚と、実際に市民に接しているときの感覚とずれを感じることがあります。

私たちは環境学習でさまざまな学校に行き、子どもたちと話をすることがあります。先日も、尼崎北高校の環境類型というクラスの生徒と一緒にさまざまな活動を行いました。尼崎市の小学生は4年生の時にクリーンセンターに見学に行っているのですが、その際に、その当時のことを聞いてみると、あまり印象に残っていないようでした。その中で、私が感じるのは、4年生のときに1回だけ何かをしても、影響はほとんどないかもしれないということです。

また、私は自分が住んでいる地域の小学校2、3校に継続的に環境活動を行っており、そこでは、2年生で鳥の観察をし、4年生でごみの授業をし、5年生でビオトープを使い、6年生でSDGsを学びます。そのような学校でも、5年生に4年生のときに習ったごみの授業のことを尋ねると、その記憶が薄れていたり、断片的なものになっていたりして、それが自分の行動につながるということはほぼありませんでした。継続性を意識して、年1回授業を行っても、子どもたちの行動につながっておらず、知識が役に立っていないという状況があります。

ただ、逆の事例もあります。去年4年生のクラスで授業を行いました。その生徒が家に帰って親に学んだことを伝え、自分の行動について話をしていたそうです。生徒の父親と話

す機会があったのですが、その方は、子どもの意識が変わり、行動が変わりそうなことに驚いていると述べていました。子どもから注意されることもあって、家族の意識が高まって素晴らしいと思うという話をしていました。そのように子どもたちの中に行動につながるような意識が芽生える可能性はあると思います。

最後になりますが、学校の先生方の中には自主的に環境活動をしたいという方がおり、先生たちを巻き込むことで非常に意味のある活動になりそうだと感じています。これからは、外側から授業で入って教えるだけということではなく、自分事として動いてもらえるような形になるように私たちが協力していけば、何か意味のある行動につながっていくのではないかと感じています。基本的に、一部でしか継続的に関わることはできないので、環境教育という面で本当に行動につながるような活動にするために協力できることが何かないかと考えています。以上です。

部会長：

ありがとうございました。アンケートなどのデータと実際の状況のずれについては以前からも指摘があり、それを埋めるためにさまざまな社会実験等を行っています。お話のとおり、1回だけではなく、複雑な環境で何回か行うことで、理解の段階から思考の段階に移るという研究成果も出ているので、まさにお話にあったとおりです。後半の議論に役立てたいと思いました。ありがとうございます。

時間も過ぎているので、アンケートを振り返りつつ、後半の2つの議題に進みます。続いて、議題2の目指す環境像について、事務局からの説明をお願いします。

議題2 目指す環境像について

事務局：

—資料4について説明—

部会長：

ありがとうございました。総じて、分かりやすい言葉に換えて、行動につながるようなという方針で取りまとめられたと思います。この件について、質問や意見がありますか。

本文に掲載するときには、この案1、案2のようなキャッチコピーのようなものと、下のイメージの説明文も掲載されるということですか。

事務局：

現在の環境基本計画と同様の示し方をするなら、先ほどの資料4の2ページに示しています、前文とこの案1または2の太字のゴシックの部分を示すこととなります。下部のイメージの所はもう少し具体的に説明するために今回は補足的に書いており、計画に記載す

ることは考えておりませんが、計画本文にも記載することは検討できると思います。

部会長：

前文のほうに掲載する文章のイメージということだと理解しました。前文の内容も含めて、意見などがありますか。

委員：

2 ページの上の表の 4 にある「市民生活・事業活動を環境に優しいものにしていくことがわかるものとしてはどうか」という意見に対して、説明で補うということですが、それがこの下の (2) の所に書かれていることですか。

事務局：

はい。

委員：

上から 4 行目に「グローバル化している現代」ということがいきなり出てきていることにはしっくりこない感じがします。尼崎はものづくりのまちなので、地元で事業活動をしている数名から数十名、百名程度の中小企業は非常に多いです。グローバル化もそうですが、一企業として見た時に、事業活動を環境に優しいものにしていくという部分に、私たちも参加する必要があると思えるような具体的な説明を入れてもらいたいと思います。以上です。

部会長：

ありがとうございます。私も同様の印象を持っています。1 段落目から 2 段落目までは、説明がグローバルに広がっていきます。3 段落目で個人の行動へと一気に落ちているので、その間に個人、地域、事業所などの果たす役割や影響のようなものをもう少し書き込むと、今回の修正の趣旨である自分事にするということにうまくつながるのではないのでしょうか。

事務局：

今の指摘を踏まえて、表現をもう少し検討したいと思います。

委員：

これからは地域分散型社会が望まれるということも言われているので、グローバルなことと個人のことの間に関係性の重要性のようなことを書くとよいつなぎになると思います。検討をお願いします。以上です。

部会長：

ありがとうございます。他にもありますか。

委員：

さまざまな地域活動をしています。多くの市民の意識は、市は何をしてくれるのかという、行政に対する要求型から始まります。つまり、案2のような「暮らしができるまち」と書くと、行政がそのようにしてくれるのか、という印象にとられてしまいます。自分たちが何をするのか、という主体性を重視するのであれば、案1のほうがいいと思います。

私たちの地域活動は、先日、10年で一区切りがつかいましたが、行政に対する要求は非常に強く、やってもらって当然という意識が強いです。自分たちが何をするのかという意識よりも前に要求していくという方が多いので、行政にとっては、案1のほうがいいと思います。以上です。

部会長：

ありがとうございます。今のご意見は案1を推すということです。事前に事務局に伝えたのですが、私も案1がいいと思いながらも、さらに自分のことと受け止められるようにできないものかと考えています。例えば、環境と調和して暮らす尼崎とするなど、ここで「まち」という言葉を挟むと、自分とまちが別物になってしまう感じがします。私たちが尼崎であるということにできればいいのですが、他都市の例を挙げると、BE KOBE や We Will Chicago のように、自分たちがまちをつくっていく、自分たちがまちだ、というような意味を込めて、「まち」というものを短縮することもできます。そのようなことを目指す環境像の3段落目あたりに、私たちが尼崎だ、工場が尼崎だ、普通の暮らしが尼崎だという意味のことを入れると、最初の2人の委員の意見をかみ砕いて伝わるのではないのでしょうか。

委員：

案1と2にある、暮らす、あるいは暮らしには、働き方は入っているのでしょうか。暮らしのイメージとしては生活がすぐに思い浮かびますが、事業活動は暮らしに含まれるのかという辺りはどうなのだろうと思いました。

事務局：

ここで言う暮らしには働くことも含めています。環境像のイメージにも書いているとおり、市民の環境意識が高まると、環境に良い商品やサービスを消費するようになり、企業側としては、市民のニーズに応えたものをつくっていく、その結果、社会と経済を変えていくのではないかと、という思いがあります。そのため、市民の意識を高めて、環境と調和して暮らしていくことができれば、社会や経済もそちらを向いて良くなっていくのではないかと、という趣旨で今回は暮らしという言葉を使いました。

委員：

尼崎市民が尼崎で働いているということももちろんありますが、市外から市内に入って働く方も多いと思います。特に大企業ではそのような方も多いでしょう。そういったことも考えると、働くということも分かるような形になるといいのではないかと思います。

内閣府の男女共同参画白書では、多様な働き方、暮らし方ということで、働くことと暮らすことを分けて表示しているという例もあります。少し長くなりますが、暮らす、働く、尼崎というような文言にすることも考えられるのではないのでしょうか。以上です。

部会長：

全国的にも、また尼崎市の総合計画でも、働くということはかなり前面に出しています。都市は「住む」と「働く」と「遊ぶ」でできているといわれますが、人口が減少する中で、まちを選んでもらうためには、遊ぶという部分も必要だと思います。環境に寄り過ぎず、もう少し人々の暮らし全般をイメージできるほうがいいのかもかもしれません。

委員：

案 1 でも、環境と調和して暮らす、暮らしと産業が調和するというようにできるかもしれません。環境は最もアピールしたい言葉なのかもしれませんが、もう少し地に足の着いた表現にするのであれば、どこかに産業を入れるほうがよいと思います。ものづくりとしてみまると偏り過ぎますが、それも含めた産業ということで、産業と市民生活とが調和するまちを目指す環境像とすることも考えられます。尼崎は製造業がたくさんある、日本を代表するものづくりのまちであり、西宮や伊丹とは全く違います。文章の中にもそのようなことに対する誇りを含めてもよいと思います。環境像のほうには、それを調和させていくという難題に取り組むという市の意気込みが欲しいです。それを言葉にして、この一文の中に入れるのは難しいのですが、できれば、産業と暮らしが調和するまち、調和する環境都市というように、もう少しひねってほしいです。これではきれいにさらっとし過ぎて、逆に尼崎らしくないと感じます。以上です。

部会長：

言葉選びが難しくなりますね。一つの言葉が強いとそれに振られてしまいます。例えば、ニューヨーク市は **Greener Greater** といって、緑にすればよいまちになるというイメージを掲げています。計画の導入部分の一部に、「才能ある労働者がどのような場所を選ぶのか、素晴らしい公園やきれいな空気は余計な飾りとは考えられていない」とあり、働く環境としても、そのような良い環境が条件になるということを謳いながら、住む人、働く人、遊ぶ人全てを引き寄せようとしています。一つのことに特化しないような表現を使っています。

次回に向けて、案 1 を基調にしながらか、環境というそのものの言葉だけではなく、住む人や働く人など、いろいろな方々が良い環境の下で暮らせるよう、目指す環境像の説明が難し

くなるでしょうが、案を考えてほしいと思います。

まだ速報とはいえ、アンケートでは若い方の回答では「わからない」「情報がない」ということが多くあります。また、これから人口が減少する中で、働く方も住む方も、これまでよりも入れ替わりが多くなると考えられます。アンケートでは、居住年数が10年以下の方が非常に多くなっていました。これまでの尼っ子のようなイメージではなく、選ばれるまちになるためにということを考えて、少しあっさりとした表現になってもいいのではないかという気がします。これは、次の方針・施策と深く関係するので、それも見据えながら進めますが、よろしいですか。

それでは、最後の議題である議題3の方針・施策に進めます。では、事務局に説明をお願いします。

議題3 方針・施策について

事務局：

—資料5について説明—

部会長：

説明ありがとうございました。ただ今の説明について、意見や質問はありますか。メモ1の3ページと4ページに今の目標施策に関して前回いただいた意見とその対応を記載しています。前回の資料とは異なり、現行計画との対比はありませんが、目標4と6については特に意見がなかったもので、前回とほとんど変わっていないという認識でいいのですか。

事務局：

前は現行計画での方向と施策を整理したものと、新しい施策を対比させるような形の表を示していましたが、いくつか指摘を受けていた点があり、対応しています。目標1で言えば、「地球温暖化」か「気候変動」のどちらの表現かというところがありました。他にも、目標3では生物多様性の部分の言葉が専門的で、難し過ぎるのではないかという指摘を受けておりました。これらについては対応したものを本日の資料に示しています。

部会長：

分かりました。前回から目標1が少し統合されており、目標6は現行計画では環境問題を知り行動するための施策が2つだったものが、5つに増えています。前半に出た意見の中にあつたような、環境問題を知り、行動に移していくという段階は少し手厚くなっているということ振り返りながら、意見をいただきたいと思います。いかがですか。

委員：

目標 6 の指標についてです。指標 6 はあまがさき環境オープンカレッジが開催する講座・イベントへの参加者数になっています。3 年ほど前から環境創造課の皆さんと議論していますが、イベントへの参加者数を中心に見ていくと、コロナ禍を考慮しなくても、ただ数を増やせばよいということになってしまい、本来の目的を逸脱するとまでは言えませんが、そのような指標でいいのかという疑問が生じています。参加者には必ずアンケートを採って、行動の変容を読み取り、意識が向上していくようなものを指標の一つとしたいということで、2 年ほど前からはそのようなものに変えつつあります。参加者数以外にもそのようなものを取り入れることはできないでしょうか。

実際に環境学習を行っている側からすると、数だけを求められると、限られた予算の中で数を増やすことが目的になってしまいかねない状況が生じます。むしろ、質の向上や行動へのつながりを指標にしてもらいたいと思っています。

事務局：

数については、ずっと増やし続けることがいいとは限らないということは、こちらも認識しています。目標値のようなものは示しておりませんが、何名以上を維持するという形にしたいと思っています。質の向上や行動へのつながりに関する指標は試行的なところもあると思います、今回は記載していません。可能なら、これらの効果や理解度がきちんと出ているかというところを確認したいと考えています。指標として設定することができるかということについては、もう一度検討したいと思いますが、そのようなものを指標として設定することについて、オープンカレッジとしては問題ないということですか。

委員

指標として捉えていただきながら、改善していくという点については、努力したいと思います。

事務局：

分かりました。では、検討したいと思います。ありがとうございます。

部会長：

ありがとうございます。私も博物館で働いていますが、このような指標に引っ張られて、人が多く来るイベントを開催してしまう傾向があることはよくわかります。さまざまな方がさまざまなことをしていると、同じ指標が集まらないので、なかなか難しいですが、あまがさき環境オープンカレッジの活動に限定するのであれば、今の委員の提案も可能かもしれません。また、多様な学習機会があるということは非常に良いことだという面もあります。もちろん、複雑過ぎると良くありませんので、そのようなことも併せて考えられるといいかと思っています。

委員：

今話を聞いて、感じたことが2点ありました。1点目として、非常に難しいでしょうが、直後のアンケートに加えて、時間が経過した後の行動化や定着化などを見る方法があればいいと思いました。

2点目です。環境関連イベントには環境に関心のある方が来ますが、環境について特に関心のない方にこそ広めたいという面もあります。ですから、環境のイベントだけで測るのではなく、全く関係のないイベントにも、このような啓発を持って行くというようなことができるかと思います。違う分野にどれだけ働き掛けたかということにも大きな意味があると思います。

次に私の意見として、目標の1から3と5について、一つずつ述べたいと思います。

まず、目標1についてです。3ページに、気候変動のリスクに備えるという施策があります。これは適応策だと思いますが、ここに書かれている適応策は、まさにリスクを減らす、マイナスを減らすというものです。尼崎はものづくりのまちなので、もう一段踏み込んで、リスクを減らすような分野に市場を創出していくという施策を入れると尼崎らしくなると思っています。

次に、目標2についてです。4ページにリサイクルの推進についての記載があり、紙と衣類について書かれていますが、まずは可燃ごみの中に混入している資源化できるものの混入率を下げ、その後にリサイクルの話になると思います。そのため、混入率を下げるということをごどこかに入れるといいでしょう。

次に、目標3の生物多様性について、外来種対策はどこかに入っているのでしょうか。もしもそれがなければ、それにも触れておくほうがいいと思いました。

最後に目標5です。8ページの方針1に環境配慮型のものやサービスを消費、普及するという記載があります。消費側のことは書いてありますが、生産側のことは記載がありません。先ほどの適応策のところと同じですが、環境配慮型の生産を尼崎の中で行い、それによって市場が広がっていくということの後押しするような施策が尼崎らしいのではないかと思います。よろしくをお願いします。

事務局：

まず、目標6について、直後のアンケートだけではなく、その後の変化を後から確認できないかということですが、実際にはなかなか難しいと思っています。例えば、目標1で言えば、マイカーの利用を控えている市民の割合や実際に行動している市民の数を指標に挙げていますが、これは講座に参加した人ではなく、毎年、無作為で市民にアンケートしているものです。市全体に効果が少しずつ現れているかどうかについては、各目標のところの市民の実感というところで把握できるのではないかと思います。

委員：

最終的には尼崎の中で環境負荷が下がることを目指しており、その方法の一つが教育です。なので、今の話を聞いて、その方法でもいいのかもしれないと思いました。

事務局：

目標 1 の適応策のところ、市場を創出していくことについては、以前の会談の際にはアドバイスをいただいているかと思います。目標 1 に入れるほうがいいのか、目標 5 の普及や生産の部分で取り扱うほうがいいのかについて、検討したいと思います。

委員：

よろしくをお願いします。

事務局：

目標 2 の紙資源のリサイクルですが、混入率については意識しています。書き方が良くないのかもしれませんが、ごみ全体の中から紙資源をリサイクルしてもらうことで、混入率を下げることを意図しています。現状では、可燃ごみの中に雑紙などが入っていますが、それをリサイクルルートに載せていき、展開検査をしたときにできるだけ混入がないように取り組んでいきたいと思っています。ですので、混入率を下げるという意識は持っています。

表 3 の外来種について、方針 2 の施策イに特定外来種については防除を行いますと記載しています。

委員：

すみません。見落としていました。どうもありがとうございました。できる範囲でお願いします。以上です。

部会長：

方針 1 に消費者側のことはありますが、生産者側のことがないのではないかという指摘については、施策イにあるサービスの普及の部分、生産者のものやサービスの開発販売を支援するという意味で理解したらいいですか。

事務局：

そのような意図で書いています。

委員：

普及がそれを表現しているということには少し疑問を感じました。あるものを普及させるということと新しく創るということは別なので、そこに疑問を感じています。

部会長：

説明文には、開発や販売の支援とあって、開発支援も入っていますが、施策イのタイトルにもそのようなことが分かる文言が欲しいということですか。

委員：

そうです。ありがとうございます。

委員：

今回、事業者アンケートの結果を見ると、事業者の意識は思ったよりも低いようです。EMSの認知度でも3割であり、それ以外のものについても、知っている割合は非常に低いという印象があります。目標1のエネルギー管理の観点からということで、コージェネレーションシステムの導入などのレベルの高いことが書いてありますが、アンケートを見ると、そもそも省エネ診断すら受ける意思がないという事業所もあります。豊中市では一般家庭向けにも省エネ診断を行っているように、省エネ診断は比較的手軽に実施可能で、改善点が見つかるので、レベルの高いことよりも前にできる省エネ診断のような項目もあればいいと思いました。

次に、3ページの気候変動リスクの部分についてです。市民アンケートを見ると、プラゴミや地球温暖化についての責任帰属や対処有効性はそれなりに高いのですが、気候変動については、リスク認知は高いのですが、責任帰属や対処有効性は低くなっています。気候変動による災害が起こっていることに対する対応は自分たちではなく、行政がすることというイメージがあるように感じます。有効性の問題もありますが、雨水を貯めるタンクの設置の補助を行っている自治体もあると思います。市民としてできることとして、水のうや土のうの準備などもあるでしょう。アンケート調査で言えば、リスク認知が高いにもかかわらず、責任帰属と対処有効性が低いことに対して施策が必要だと感じました。

その意味では、方針3の所は役割としての公助と自助の書き分けが必要かもしれません。行政が行うことと一般の市民が行うことが分かるような書き方にするほうがいいかもしれません。一般論的に書くのではなく、誰が何をするのかを明確に書く方がいいかもしれないと思いました。

目標2の循環型社会については、市民アンケートを見ると、かなり意識は浸透しており、関心も高く、分別等も非常に進んでいると思います。一方で、現在課題になっているのは、プラスチックと紙の資源化です。これには計画の階層関係があるので、環境基本計画に書くのか、一般廃棄物処理基本計画に書くのかという問題がありますが、指標としてプラスチックと紙については書かなくてもいいのでしょうか。それは個別計画に入れているので構わないという理解なのでしょうか。

少し議題が戻りますが、目指す環境像の説明文で、最初に、『大量生産、大量消費、大量

廃棄を前提とした』と書かれています。10年前はそうだったかもしれませんが、恐らく今はそのようなことはないと思います。アンケートの結果を見ても、循環型社会がかなり進んでいることを考えられるため、この書き出しは非常に気になります。一方で、市民アンケートを見ると、非常に意識が低いのは、生物に関するものや、自然破壊、または公害の歴史という辺りだという印象があります。

確かに、尼崎市は公害でフォーカスされましたが、今回の結果を見ても、かなり改善されてきているという認識も高まっています。公害の経験を克服してきたということを書き出しの部分に入れるほうがいいのではないかと考えています。ローカルな課題には対応してきましたが、現在はグローバルな問題になってきているというような入り方で、環境像のほうも修正したほうがいいのではないのでしょうか。

次に、目標3についてです。市民アンケートで、生態系サービスに関する認知度の質問がありますが、方針・施策には生態系サービスという言葉が全く出てきていません。また自然の恵みが生態系サービスであるということが理解されるかという問題があります。もう一方の生物多様性地域戦略策定部会との関連もあるでしょうが、市民アンケートでは、目標3に関する意識がかなり低いので、生態系サービスについてどこまで言及するかなど、検討が必要だと思いました。

また、7ページの施策オの所で、公害の歴史の継承、環境に関する情報の発信についても、市民アンケートでは非常に低い傾向があるので、これに関する指標は必要ないのでしょうか。施策はありますが、評価する指標がないのではないのでしょうか。

続いて、8ページの目標5の経済グリーン化についてですが、先ほどの事業者アンケートの結果にある、EMSやTCFDなどの何らかの取組に関する指標についても、認識とその実施割合に関する指標が必要ではないかと感じました。

最後に、目標6に関しては、先ほどから述べているように、フォロワーに関する指標が多いのですが、リーダーになる人材を育成するということで、人材育成の数や、登録型のものであれば新規のものが分かるとより良くなると思います。以上です。

部会長：

アンケートを踏まえてということで、次回の認識から行動に至る有効なシナリオが分かれば、そこは特に注意しながら、記載を調節したり、項目を増やしたりすることを検討していただきたいと思います。

委員：

3ページの目標2の循環型社会の所は先ほどの質問とほぼ同じ意見で、プラスチックと紙のリサイクル率は入れなくてもいいのでしょうか。

また、2ページの方針1の施策ウ、「電化が困難な高温域での熱利用について」という所がよく分からなかったなので、説明が欲しいです

事務局：

指標については、また検討させていただきたいと思います。

電化が困難な高温域については、産業用の熱利用が対象になると考えています。産業用では、燃焼を伴うような作業が必要なため、現在は都市ガスを使っていると思うので、これではCO₂が出てしまいます。そこで代わりとなるものとして、水素を使うか、メタネーションでCO₂が出ないようなガスを使うのかというようなことを、現在さまざまな技術が開発されている途中ですので、対応していきたいと考えています。

委員：

分かりました。高温の排水のことではないのですね。ありがとうございます。

部会長：

それでは、これをもって、今回の審議を終えます。次回も同じ方針・施策と環境像について、審議ができます。詳しいアンケートの結果も含めて、このことについてもう一度、皆さんからの意見をいただきたいと思います。よろしくお祈いします。事務局も、スケジュール的に大変ですが、準備をよろしくお祈いします。

最後に事務局から何かありますか。

事務局：

本日は長時間の審議、ありがとうございました。本日は、資料の送付が遅くなってしまい、本当に申し訳ございませんでした。私たちも次回はこのような不手際のないように、十分早めに資料等を提供し、検討していただけるように準備したいと思います。よろしくお祈いします。

また、次回は、具体的な取組や指標などについてもお示ししたいと考えておりますので、資料を十分前もって配布し、検討していただくことで、実りある部会にしたいと思っております。よろしくお祈いします。本日は、どうもありがとうございました。

部会長：

以上をもちまして、本日の部会を終了します。

以 上